

# まんだら通信

第197号 (通巻233号)

平成24年11月 西暦2012年 佛暦2578年 皇紀2672年

安房国八十八ヶ所 第一番札所  
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL.0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org



## オープン・テンプル

聞きなれない言葉ですが…。  
盆栽好きやバラの好きな人、沢山の花が見事な自慢の庭を、自由にみて下さいと町中で開放することを『オープンガーデン』というのだそうです。

お寺、殊に紫雲寺は一年中開放していませんから、その意味ではいつも『オープンテンプル』で、何も今更断るまでもないことですが、傍から見ると肝腎の私がジーンズ姿でいつも忙しそうに見えるので、皆さん敬遠しているのかなと反省して、取り敢えず「毎月の第三日曜日には、どなたでもおいで下さい」という日にしました。

お寺だからと、気負い込んで難しい話をするとかではなく、お茶を飲みながらの、ありきたりの世間話もよし、落ち着いて写経もよし、持参の弁当を食べて昼寝も良いことだと思えます。

時間がゆつたりと流れていたあの頃、商売を忘れたように、のんびりとおしゃべり

をして行く行商のおばさんや、ご主人の暴力に耐え切れず、九十九里の方から逃げた奥様を、問題解決まで一週間余りかくまったこともあります。少なくとも紫雲寺は、三百六十五日、門限なしで出入り自由の、開かれた公民館(朝日新聞記者さんの言葉)ですから何かとせよこましい今の世の中、命の洗濯、ストレス解消に丁度よい場所だと思います。

## 龍祐君の練行

十月十六日から二週間、孫弟子龍祐(りゅうすけ)が、京都の総本山智積院で練行(れんぎょう)をしてきました。

耳慣れない言葉ですが、宇宙そのものを本体とする大日如来と、小宇宙である自分とが一体になるための修行…といえば余り外れていないと思います。

禅宗なら座禅、浄土系では念仏、日蓮宗ではお題目というところでしょうが、こちらは「人間の感覚を総動員して仏様と一体になる」真言密教ですから、口に真言を唱え、手には印を結び、ひたすら本尊を念ずる行を続けます。

今回の行者さんは全国から十七人集まったようですが、財布や携帯電話などは、最初にお寺の金庫に預け、新聞テレビ、歌など外の世界のものはご法度ですから、五時の夕飯が済めば明日の予習や読書などに、充分時間があるということになります。

大部屋を襖で仕切って、四〜五人が一部屋だそうですが、近ごろ流行りの個室でないところがとても好ましいですね。譲り合って暮らすのが世の中、ということに身に付けるには、大部屋暮らしが一番いい仕掛けですから。

食事はダシも含めて動物性のものは一切使いませんので、お兄ちゃんに痩せて帰ってくるだろうと思っていたところ、全くそんなことはありませんでした。

ニンニクやネギやトウガラシなども使わない本当の精進料理ですから、若い人にはどうかなと思ったのですが「大好物のカレーは出なかつたけれど、専属の栄養士さんが作ってくれるからとても美味しかった」のだそうです。

世の中の職人技、芸事など総てに当てはまることですが、有る期間特訓をしたからこれでいいやではなくて、それをバネに普段の暮らしの中で自分の人柄を磨き続けることが、世の中のお役に立つために何より大事なことで、ジイさまは楽しみにしています。

## ふれあいコンサート

日本の叙情歌と叙情ジャズ

十一月三十日(金曜日)

開場午後六時 開演午後六時半

会場 紫雲寺本堂

出演

第一部 加藤千枝(ソプラノ)

シフォンヌ(ピアノ・ダンス)

第二部 深津純子(フルート)

西直樹(ピアノ)

地元の加藤さん他による、誰もが知っているお馴染みの歌とダンスの第一部。説明不要、深津純子さんのフルートと、今年は特にジャズピアノで世界的に名高い西直樹さんとのコンビによる第二部という構成です。西さんは、お母さんがペレスプラド楽団のダンサーだった関係から、幼い頃からラテン音楽に親しみ、猪俣猛、前田憲男、松本英彦、原信夫、綾戸智恵、坂本スミ子、藤家虹二という錚々たる人たちと共演し、嘗て、カーネギーホールの大ホールでの演奏会は、大成功を収めて評判になったそうです。

三年前、両陛下ご成婚五十年記念の音楽会では、皇居の桃華楽堂で、原信夫さんのビッグバンドに加わり、両陛下にジャズをご堪能戴いたということでした。ご期待下さい。



対策の仕掛けで、今ではブラジルやインドネシア、シンガポール、アメリカなど沢山の国で採用されているそうですね。近場に来てくれると我々年寄りには有難いことです。▼秋も深まって実りの季節。ノブドウ(野葡萄)【ブドウ科ノブドウ属】です。白から空色、そして見事な紫色と、美味しそうに見えますが、エビズルと違って美味しくありません。でも小鳥たちには人気があるようで、海岸の砂防林や里山のへりなど、至る所に生えていますね。木枯らし間近のこの季節、オレンジ色のカラスウリ同様懐かしい思いがします。2012/11/07 龍渉

80年近く使い込んだ身体の部品は、あちらこちらに傷みが出てきている、ということなんですね。空いた時間に『てんとう虫テスト』という体力テストをしてもらいました。その判定は「あなたの歩行年齢は15歳若い63歳です」だそうです。何だか得をした気分です。かかった費用は締めて14万円なり。1ヶ月前に役所に申し込んでおけば、5万円までの補助金が出ますが、市長さんもお金のやりくりが大変でしょうから、今年は貰いません。▼会議で市役所に行ったら移動交番に出会いました。交番は日本が誇る治安

▼相変わらずの一つ憶えですが、光陰矢の如しは本当ですね。今日はもう立冬。木枯らし1号が、いつ吹いても不思議ではない季節になりました。▼20年は続いている亀田病院での人間ドック。10月9〜10日に行ってきました。眺めの良い13階の高級レストランでの食事と、ホテル並みの部屋。検査の間の待ち時間の、くつろぎながらの読書も嬉しいことです。半月後届いた『検査結果報告書』には、肺機能は再検査。腎臓からの出血。脳のMRI検査は、左前大動脈狭窄の疑いあり、その他諸々でした。ガンなどの疑いはないようですが、

## 余滴



# にっぽん人情小噺

## 第八十二話 嫁の仕事

三遊亭鳳豊

えー、いまや日本は高齢化社会でございましてね、まもなく六十五歳以上が全人口の四分の一を占めるそうで、四人に一人が高齢者ということですね。

その昔、団塊の世代の人たちがまだ子供の頃、言われたそうですね。「君たちは、墓場まで競争だよ！つて。墓場までいかなくとも、これから老人用の施設だつてなかなか入居できません。

あるグループホームのことです。認知症のおばあちゃんばかりと一緒に生活しているところに、親孝行な息子さんを訪ねてきました。そして、自分の母親のそばに行き、「お母さん、息子のカズオだよ。わかるかい？」と大声で尋ねました。ところが、おばあちゃん、認知症で、自分の息子の顔も名前もわかりません。「はいはい、どなたですか？」と逆に尋ねる始末。

それでも、息子さんはお母さんの面倒をよくみてくれます。「おやおや、親切な人ですねえ。どこのどなたですか？」なんて聞くものですから、息子さん、また大きな声で「カズオだよ！」。

それから、数日がたつて、カズオさんがまたグループホームにぼけてしまったお母さんに会いにいきました。お母さんは、認知症の仲間と一緒に、同じ話ばかり繰り返しています。意味が通じなくても、なぜか、みんな、楽しそうでした。カズオさんも仲間に入り、いろいろな話しているとお母さんが何を思ったのでしょうか、突然、カズオさんを指差して大声で言いました。「あんたは、誰ですか！」

息子さんはお母さんが目をつり上げて、すごい形相で叫ぶ姿に驚いていると、まわりの認知症のおばあちゃんたちが、声を揃えてこう言ったそうです。「カズオだよ！」

こういふ楽しい部分のある話ばかりだといのですが、今日の話は、もっと深刻です。東京の郊外の高級住宅地で実際にあった話です。

高橋久美子さん、五十歳。ご主人は一流会社の役員をされていて、一見、幸せそうなご家庭に見えますが、家庭内は大変です。まず、ご主人のご両親と同居。しかも、ご主人の父親が病気で、ほとんどベッド生活。さらに悪いことに、ご主人の母親が重度の認知症でございまして、毎夜、徘徊をする。そんな義理の両親の世話に、久美子さんの大仕事。これが、まあ、聞けば涙でございませぬ。

久美子さん、気がつくつと、姑がいなくて、あわてて外を探します。これが一度や二度ならまだしも、毎日のようだとくたくたです。まさか、部屋に鍵をかけて閉じ込めておくわけにもいかず、舅の世話をしていると、さつと家を出て行ってしまふのですから、たまらない。最寄り駅に行き、駅員に尋ねるのですが、どこに行つたかわからない。冬の寒い日に、二駅先まで歩いて見つけた時は、涙が出たそうです。

そのうち、姑にもつとひどい症状が起ります。例の、便のなすりつけです。自分がしてしまつた便を自分の体じゅうになすりつける。髪の毛まで、それはそれは凄まじい光景でございませぬ。それを見つけた久美子さんは、嫌がる姑を風呂場に連れて行き、シャワーで頭の前から体中、洗い流す。その間じゅう、ギャーギャー叫び声が聞こえ、高級住宅地ですから、老人虐待を疑われ、まさに地獄だつたそうです。

施設に入つてもらつたらいいだろうというご意見も皆様のなかにはおありでしょうが、それは舅も許しませんし、親孝行なご主人も「そんなかわいそうなおとができるか」と泣きますから、久美子

さんは何も言えませぬ。

ご主人が朝早く出勤したあとは、ベッドでの舅の世話、そのあとは認知症の姑の見守り、ちよつと目を放せば、台所が火事になつてしまふ。夜になると、徘徊。家に連れ戻せば、大便のなすりつけ……。とうとう耐えきれなくなつた久美子さん、九州にいる実家の母に、泣きながら電話をかけました。これまでに一度もなかつたことでした。

「お母さん、私、もうダメ！ 一生懸命尽くしたけれど、耐えられない。」でも、実家のお母さんは慰めてくれません。嫁にあげた以上、実家に呼びもどすわけにはいかないと思つているからです。

「何、言つてるの。それが嫁の仕事ですよ！ そんなことで弱音を吐くような娘に育てた覚えはないよ！」

久美子さん、その晩、覚悟を決め、明日の朝、夫がまだ寝ている時に家を出ようと決心します。夫が留守の時だと、ボケた姑が台所で火事でも起こしたら大変だからです。

朝になりました。この家で過ごす最後の朝だと、久美子さんは思いました。そして、夜そつと最低限の荷物を詰め込んでおいたキヤリーバッグを手に、台所を通つた時、思わず、「あつ！」と声をあげてしまひました。

そこにはベッドで寝たきりのはずの舅が、必死で流しに這い上がるうともがいてるからです。

「お義父さん、どうしたの！」

「いや、久美子さん、昨夜遅く、私の枕もとにある専用の電話が鳴つたんだよ。君のお母さんからだつた。『うちの子は、母親の私が言うのもおかしいですが、決して泣き言など言う子ではありません。がまん強い子です。その子が、もうダメだと言つています。お義父さん、どうか助けてやってください』つてな。だから、せめて、自分たちのお粥ぐらい自分で作ろうと思つて。」

義父の膝は、まだ床にいたままです。「お義父さん、私がありますから、どうか安心して……」

（ああ、もう何があつてもいいや。これが、私の大事な仕事なのだ）

久美子さんの心は、この瞬間、ウソのように晴れ晴れとしてきました。それから一年後、義父は亡くなり、義母は施設に引き取られていきました。そして、久美子さんのお母さんも亡くなりました。

いま、久美子さんは介護のボランティアの組織を運営し、たくさんの仲間たちと、身体の不自由な多くのお年寄りを手助けし、喜ばれているそうです。

この記事は、月刊誌MOKU十一月号からの転載です。書店では見かけることの少ない、大きくはない出版社かと思うのですが、人間らしい生き方を考えるための参考になる記事が多い、得難い雑誌です。普通なら転載など許可しないのですが、「お役に立つならどうぞご自由に」という有難いお言葉に甘えての転載です。

### 一面左上の写真について

スリランカのアンギラサお坊さんがメールで送つて下さつた、スリランカ成田山幼稚園の運動会のパレードです。園児は四百人余り。首都コロネボ近くの田園地帯、ランボクナガマという小さな町にあります。

お揃いの民族衣装の鼓笛隊を先頭に、これから開会式の整列をするところでしょうか。日本のように腰を下ろすことはなく、日差しの強い広場にみんな起立しています。

毎朝の朝礼も同じですが、日本とスリランカの国旗、仏教旗、園旗の掲揚のあと、「ブッダ・サラナン・ガッチャーミ」に始まるお勤めをみんなでお唱えします。スリランカは社会主義国ですが、宗教を大切にしますので、毎月の満月の日はボヤ・デイといって、仏教徒の感謝と反省の日ですが、国の祝日でもありません。この日はみんな、お寺参りをしたりして静かに過ごします。